失業保険の論争

A. Doron（イスラエル）

本稿には，失業者に対する社会保険の採用について，20年間も続けられた論争の政治的論評と歴史的概観が示されている。

失業保険は社会的公正についての２つの基本原則を含んでいる。すなわち，１つは失業時における困窮と苦悩から各人を保護する協力と相互扶助の概念で，もう１つは，慈善ではなく，権利として，仕事のない期間に代替となる所得を保障する必要性である。国家が創設された1948年に，失業保険の採用は一般に広く賛成された。1950年に政府によって設けられた各省代表の委員会により，「社会保険の計画」が提出されたとき，その勧告の１つはそのような制度に関連をもっていた。その時においてすら，大蔵省と労働省の代表は延期を要求したが，かれらの主張は大量の移住者受入れが，若い国ではまづ優先されるべきであるということであった。1953年には，新しく到着した移住者は，失業給付を通じてではなくて，建設的な仕事により，経済的にまた社会的に吸収されるべきであるという見解が，しばしば示されていた。失業者の約60％は，その当時この国の労働力の約10％に相当しており，かれらは発展途上の国ぐにからやってきた新しい移住者であった。これらの移住者のうち，多数の人びとは労働の意義をほとんど理解していなかった。かれらに対して現金による失業給付を支給することは，かれらの道徳心を害し，かつ労働に対する健全な態度をかれらが身につけるのを妨げるであろう。このような事情から，失業者数が増大したときに，かれらのために，公共事業計画が設けられた。

他の提案は「労働に対する権利」の法律を通過することであったが，しかし1955年から現在まで，雇用造出の計画は，いぜんとして失業問題を取扱う手段だけに限られている。１月当りの就労日数のうち，ある所定の日数に対して，失業者はいずれも不熟練労働者の賃金と同一賃金を保証されてきたが，その賃金は各失業者の家族構成に応じて異なっていた。1966年は「操業短縮」の年であったが，この年には，専門職，頭脳労働，および熟練労働者の間に失業者が増大し，失業保険の必要性が再びむしかえされた。1967年以後，政府はある最低生活水準にもとづき，なんら特殊な法令も用いないで，失業給付の支給を開始した。1968年の専門家委員会は，その活動を再び公共事業の作業場と雇用喪失に対する現金給付を法律化するある法律を勧告することに限定したが，そのような動きにもかかわ

らず，この委員会は失業保険の採用に反対した。

要するに，過去20年間における問題の発展には，３つの要因が影響を与えている。これらの要因の１つは経済的な分野で，つまり，生産行程に積極的に統合される大きな労働力の提供である。第２の要因は新しい移住者に対する古い住民の態度から生れるものであるが，その理由は，古い住民達が新規移住者のニードを常に理解しないので生ずる。第３の要因は，社会政策の立案者達がもっている社会的な保守的傾向に見出だされ，これら立案者達は，保守的なアプローチをする高級なランクに坐っている政府の官僚主義者達である。かれらの立場はテクノクラシーなしかも行政的な自己満足より生れるもので，この国に一般的な態度をある程度反映しており，その結果，かれらは失業保険の立法に反対したのである。

The Struggle for Unemployment Insurance in Israel, "Hama'avak al Bituah Avtala Bemdinat Israel", *Molad*, June 1969, pp. 439-448; No. 135, '69.

フランスの医療消費

年金法の改善

Clèment Michel（フランス）

本稿には，医療サービスの実施と経済的および道義的考察が示されており，注釈つきの統計的解説と図表が付け加えられている。

医療サービスを実施する第一義的目的は，健康を保護することである。健康とそれに対する権利を定義づけるために，多数の試みが行なわれてきたが，しかし，基本的な考察は集団的な意識における病理的分野と標準的部門の間に限定されており，その集団的な意識が，健康保護にかんする支出の容認に結びついている。過去２～30年の間，健康保護の概念は，測ることのできないほど前進しており，現在では，３つの部門から検討されている。すなわち，それらは医学およびそれがもつ可能性の科学的および技術的な進歩，たとえば，全体として社会的活動，および諸問題と健康保護との統合のような社会的ニードの概念，個人のものとされた医学に対する最近の復帰である。しかし，最後の部門は，科学的医学の分野における人間性を奪うことに対する反動としてだけでなく，各人が当人自身の生物学的な規範をもち，かつある単一の生命をもつ存在物，体と魂，肉体と精神をもつのを示すという発見の結果から生れたもので，いうなれば，個人のものとされた医学はそれぞれ各人の全体に対する医学である。これらの環境のもとでは，医療の消費はどのように要求され，かつ支出は測定されるべきで